

---

# インドネシアプログラム

2023.9.2~9.19



---

SUSAP 2023 SUMMER

## 〈参加者プロフィール+自分の魅力〉

### 山佐啓斗（団長）

農学部生物科学コース3年

探究心、責任感が強く頼りになる一方でなんだかんだ優しく、場を盛り上げてくれる



### 高口ひな（副団長）

経済学部経済学科3年

何があっても動じず、自分のペースに相手を引き込む



### 與田帆夏

経済学部経済法学科3年

常に周りの誰かを気遣い、笑顔で手を差し伸べようとしてくれる優しい性格で、一人一人をしっかりと見てくれている。いつカメラを向けられても瞬時にカメラ視線をキープすることができる。



### 入部航太（右）

経済学部経済学科1年

人のいいところを見つけるのが上手い



### 浅野寿佳

医学部医学科1年

とにかく積極性と行動力がある、賢いのは間違いないけどどこか抜けていて親しみやすく可愛い



## 杉浦瑞生

農学部国際地域マネジメントコース1年

赤髪がオシャレでかっこいい！頼りになるし、周りのことみて考えて行動できる優しい子！！冷静に物事を判断しているから、一緒にいると安心感がある！あと、ツッコミがうまい！笑



## 阿部香菜（左）

農学部生物資源科学科1年

2回に1回くらいアホなことをするが、責任感は強い  
ため、役は全うしてくれて頼りがいがある。財布を持  
参せず、奢らざるを得ないという背水の陣を完成させ  
るのが上手い



## 〈プログラム内容〉

期間：2023年9月2日～19日

留学先：スラバヤ工科大学、マラン国立大学（インドネシア）

内容：スラバヤでは、ITSで2週間に亘って実施される「CommTECH 2023」に参加し、様々な国の参加者と共に、多様性を学ぶための活動を通して、地域社会やグローバルな問題の学習を行った。

研修には、バティック作り、インドネシア語、伝統音楽、ダンス、観光地の訪問も含まれており、課題解決型のプロジェクトへの参画を通じて、参加者は様々な角度から多様性について理解を深めた。

マランでは、2日間マラン国立大学の学生と交流した。1日目の交流会を通して互いの踊りや伝統衣装などの文化を共有した。また2日目の休日では向この学生さんが遊園地や滝、アスレチックに連れて行ってくれた。2日間ではあつたがとても濃い思い出ができた。



## ●インドネシアについて

人口 約 2.7 億人

面積 192hkm

首都 ジャカルタ

東南アジア南部に位置する。世界最多の約 1,7000 以上の島を有しており、民族や宗教、文化など多様な面が多く見られる。過去にはオーストラリア、そして日本から植民地支配を受けた。1945 年にオーストラリアから独立を果たし、現在ではインフラや投資環境の整備により安定した経済成長を実現している。

独立以降日本とは政治や文化面など様々な面で友好関係を強化してきており、国民の多くが親日感情を持つ。



## ●ITS について

1961 年で設立され、インドネシア第二の都市スラバヤの東部に位置し、180 ヘクタールの広大なキャンパスを有する。学生数は約 9500 人で、多文化国家ならではの様々な宗教コミュニティが学内に存在する。10 学部 40 学科からなり科学技術に関するコースと研究を提供している。教育の面の他に、「スマートエコキャンパスプログラム」などの取り組みに見られるように環境管理にも強いコミットメントを持つ。



## ●マラン国立大学について

インドネシア・ジャワ島東部に位置する。1954 年に設立され、工学部、数学自然科学部、経済経営学部、教育学部、文学部、スポーツ科学部などを擁し、約 4 万人の生徒を有する国立大学である。教育学部を起源とする総合大学であり、インドネシアにおける先進的教育研究の拠点である。



## ●市場・物価

インドネシアの物価は円安にも関わらず日本と同じくらいかそれ以下の値段であった。特に屋台やナイトマーケットは日本円で100~200円で買えるものが多くインドネシアでは美味しいものを安くお腹いっぱい食べることができる。また1BUY1GETやあと何円払ったらもう一つついてくるという販売方法が多くみられ、食品だけでなくシャンプーや洋服にもみられ驚いた。市内には大きなモールがたくさんあり想像以上に発展していた。モール内のほとんどのお店やお土産屋さんではクレジットカードを使った。



## ●食事

辛い味付けが一般的。唐辛子がそのまま入っていたりする。現地の方は優しく「NO SPICY」と言ったらプログラム中のお昼ごはんを日本人好みにしてくれたり、チリソースを抜いてくれたりでありあまり食事で困ることはなかった。数あるインドネシア料理の中でも私たちが特にお勧めしたいのは、ホテルの近くのナシゴレンの屋台である。もし次回のインドネシアプログラムでもHOTEL88に泊まるならば、ぜひ挑戦してほしい。ちなみに横の唐辛子は赤くなくても辛いから食べてはいけません。筆者は食べて死にそうな思いをしていました。



## ●交通機関

現地民の多くがバイクを利用する。交通量が非常に多い上、横断歩道や信号が少ないため、道を横切る際は非常に注意が必要である。私たちは日常の移動ではタクシーを使ったが20分ほど乗っても100~200円と非常に安い。またバイクタクシーも利用できる。



## ●プログラム外の交流

プログラム以外にも多くの時間をメンバーたちと共に過ごした。ロッククライミングやボートといったアトラクションも多く訪れた。ゴーカートにも行ったが、メンバーたちが表彰台やらブロックやらに激突して壊していた。少し怖かった。またその他にも東南アジア最大級の動物園や、夜市といった現地ならではの場所も多く訪れた。いずれの場所でも、メンバーたち、そして現地の人々のやさしさに触れながらより一層親睦を深めることができた。



## 「今回の研修を振り返って」

### 経済学部 3年 高口ひな

インドネシアでの留学を通して私が学んだことは、多文化共生社会において自分の意思を持ち表現すること、自分と異なる他を尊重することが重要だということである。

これは現地の人から、また ITS に参加していた様々な国の出身のメンバーから学んだことである。今日の社会で個性や多様性が重視されているが、私たちはマジョリティの中にいることに安心感を持ち、自分と異なるものや知らないものを受容するのに時間がかかる。しかしインドネシアでは、多数派であるイスラム教、その他少数派の仏教、ヒンドゥー教、キリスト教など多くの宗教が共存している。それぞれの宗教の礼拝の場を訪れて回ったときに、説明してくれる現地の人々が、おそらく知っていることも多々あったと思うが私たちに説明しながら自らも学んでいるようで、より理解を深めようとする姿勢が非常に素敵だと感じた。

自分のことを他人に理解してもらうには、自分の信仰や意見、気持ちを表現する必要がある。宗教では、それを服装や習慣で自分の宗教を表現しているわけだが、宗教以外の面で自分の意見を共有する大切さを学んだのは、参加者の一人からだった。男女格差の講義の中で自分のつらかった体験を涙ながらに語ってくれた。日本でも何度も聞いた議題だったのだが、正直あまり深く考えたことはなく身につまされる話ではないとどこかで思っていたのだろう。しかし、この問題をきちんと問題としてより多くの人に認識してもらうために、勇気をもって話をしてくれた彼女に私は考えを改めさせられた。私たちがイスラム学校を訪れた時や、モスクや教会を訪れた時、マラン大学に行った時などその他様々な場面で、現地の人たちにとっては外国人である私たちを快く受け入れてくれた。誰に促されるでもなく積極的に関わってくれるし、いろいろなことを教えてくれた。自分と違うものを排除しようとせず、尊重し理解しようと、ないそ

の文化を好きになろうとする姿勢は、自分にも取り入れるべきだと感じた。

年齢、性別、国籍も違う人たちが集まって約2週間、宗教やジェンダー。文化について学びながら、また放課後や休日はいろいろな国から集まった参加者同士で国際交流を惜しみなく楽しみながら、かつ最終プロジェクトの準備も進ながら、二週間過ごしたわけだが、特に大きなトラブルなく日々仲が深まっていくのを実感しながら最後までやり遂げることができてよかったと思う。他の参加者との語学力の差を痛感し、自己嫌悪に陥ることも多々あったが、一生懸命理解しようとしてくれ、いつも楽しい雰囲気でのコミュニケーションを取ることができた。多少言葉が伝わらずとも、その場で起きたことや、雰囲気、今回私たちの留学中大きな力を与えてくれた歌など、感じることは皆共通で、通じ合っている気がするが多々あったので、いい関係を築くことができた。

これからの学校生活ないし社会に出てからも、価値観の違いにぶつかることは絶対にあると思うから、この留学での経験をうまく活用し、有意義な社会活動を送りたいと思う。



## 「多文化共生の可能性」

### 経済学部経済法学科 3年 與田帆夏

私はインドネシアのスラバヤ工科大学(ITS)が提供する CommTECH プログラムに参加しました。このプログラムは、人口が多く、多宗教で、異なる文化が混在しているインドネシアで多文化共生を学ぶことを目的と

するものでした。近年、グローバル化が急速に進展している世界で、異なる文化や宗教、言語を持つ人々が同じ社会で共存することが求められてきており、多文化共生は必要不可欠な生き方であると思います。この多文化共生を日本国外で学ぶことは、自分の価値観をより良いものに変え、また、異文化への理解を深めることが出来ると思い、このプログラムに参加しました。

このプログラムには、マレーシア・ドイツ・台湾・アメリカ・タイ・日本から集まった、年齢も国籍も宗教も異なる人々が参加しており、英語でコミュニケーションをとりながら、インドネシアの様々な宗教や文化について講義を受けたり、実際に宗教の建物を訪れたり、伝統的な踊りや楽器、染物などに触れたりしました。これらに加えて、私たちは朝の1時から車で移動し、プロモ山の日の出や滝を見に行きました。みんなで見た感動的な自然の景色は忘れることの出来ない一生の思い出になりました。また、私たちはホテルに滞在しており、夜ご飯は自分たちで調達して食べていたので、放課後はこのプログラムのメンバーたちと一緒にモールや屋台に行き、一緒にご飯を食べたり遊んだりしていました。この時間があっただけで他のメンバーとさらに仲良くなれたと思うので、ホテル滞在で良かったです。それでは以下で、宗教・文化について詳しく記したいと思います。

インドネシアでは約87%の人がイスラム教、10%がキリスト教、1.7%がヒンドゥー教、0.7%が仏教、0.05%が儒教、0.2%がその他の宗教を信仰していると学びました。イスラム教が大半を占めているため、町中にはヒジャブと呼ばれるスカーフを頭に巻いた女性が多く、至る所にお祈りをするモスクがあり、学校やカフェにさえも祈祷室が設置されており、国全体でイスラム教への理解が深いと感じました。しかし、少数派の宗教においては、テロがあったり、教会を建てるための許可を得るのが難しかったりなどの問題があったので、お互いの宗教をより尊重し合えるような社会を実現できれば、インドネシアに限らず世界中がより良い社会になると感じました。

スラバヤには、インドネシアの文化を学ぶような芸術学校がありました。この学校では、インドネシアの伝統舞踊であるムアング・サンカールや民族音楽であるガムラン、人形を用いて芝居をするワヤン・クリなどを学生たちが学んでいました。この学校を見学した後、私は自国の文化の知らないところが沢山あると感じたので、外国人に自分の文化をきちんと伝えることが出来るように自国についても学びたいと思いました。

また、CommTECHプログラムを終えた後、スラバヤの南にあるマランに移動し、インドネシアでの最後の2日間をマラン大学の学生と過ごしました。ここでは異文化交流を主に行い、私たちはインドネシアの文化を体験し、マランの学生は日本の文化を体験しました。マランの学生は自分たちで日本の浴衣の着付けをしており、日本人でも着付けが出来ない人は多いので驚きました。異文化への関心の高さはグローバル化に繋がっており、これから目指すべき社会へと繋がるので、マランの学生を見習おうと思いました。マランの学生とは遊園地に行ったり滝を見に行ったりしてとても楽しめました。

このインドネシア留学を通じて、国は違っても人は同じところが多いと感じました。私は、いずれ人々はお互いの文化を尊重し合い、多文化共生は世界中で実現可能になると感じました。どこの国の人もみんな優しく、国境を越えて交流する楽しさと交流する価値を学ぶことができ、この機会を与えてくれたことに感謝しています。ありがとうございました。





## 「SUSAP2023Summer 成果報告書」

### 農学部 3年 山佐啓斗

私史上 2 度目の海外となる今回の SUSAP インドネシアプログラムは前回の海外とは比べ物にならないくらい有意義なものとなりました。今回の研修ではジャワ島第二の都市スラバヤと、そこに対抗心を燃やすマランを訪れました。

スラバヤで行われた CommTech Nusantara Onsite 2023 ではインドネシアの宗教や文化についての研修を主に行いました。インドネシアの宗教を主に構成するイスラム教、ヒンドゥー教、カトリック、プロテスタント、仏教、儒教について座学で学んだ後、実際にモスク、教会、寺院を訪れました。このプログラムには私たちの他に 4 カ国の人たちも参加しており、年齢も高齢の方から私たちのような若者まで幅広かったです。そのため、国ごとに異なる価値観だけでなく、年齢ごとに異なるそれについても共有することができました。プログラム終盤にはプロモ山系への登山や高さ 200m のマガリプラ滝で仲間との絆も深まりました(Fig.1)。

マラン視察ではマラン大学の方々と二日間にわたり交流を行いました。異文化交流をしたり、滝や娯楽施設に連れて行ってくれたりと、とても親切にしてくれました。一つ意外だったのが、彼らが口にするお酒です。交流 2 日目の夜に誘われてバーを訪れた際、彼らはタバコもバリバリでファンキーなところもあるため、てっきりお酒も度数高めのをぐいぐい行くのかと思っていました。しかし、彼らが注文したのは度数が 5~6%の優しいお

酒でした。私は可愛いと思うと同時に少し安心しました。チェックアウトの際には時間がない中、わざわざ見送りにもきてくれて、本当に楽しい時間を送らせてくれて、感謝しかありません(Fig.2)。

今回の研修で印象に残ったことは、まず、インドネシアという国がいかにして成り立っているのかということです。教員免許を取得中の私にとって、インドネシアの教育は参考にできる部分が多々ありました。インドネシアは言うまでもなく多文化共生社会で、さまざまな宗教の人々が同じ地域で生活しています。それにも関わらず、そこまで頻繁には暴動や宗教間の争いが起こっていません。その理由の一つに教育の力があると私は考えました。研修の一環で、ある高校を訪れたときや、現地の子どもたちと交流していた際に、宗教に関わらずどの子供達も仲が良いことに気がつきました。学校では宗教に関係なく、平等に教育を施しているのでしょう。

確かにこれのどこが凄いのかわかりにくい部分もあるかもしれませんが、また、そんなのは当たり前だと思う人もいるかもしれませんが、それはあくまで無宗教の日本人の価値観から見た話です。私は宗教の違いを互いに認めさせ、お互いが対等な関係なると認識させることは日本でのいじめ防止のための道徳教育などのレベルよりもはるかに大きなことだと思います。宗教は生徒個人でどうこうなるような問題ではないからです。

学校側にとっても宗教ごとに教育を施した方が礼拝の時間や宗教独自の決まりなどが統一されるため、圧倒的に効率的なはずですが、しかし、こうして宗教に関係なく教育を施すのはやはりそう言う意図があつてのことだろうと思います。そしてまた、これがこのインドネシアの社会形成の礎の一つとなっているに違いありません。

この国がどのようにして子供達に宗教観の違いを認めさせ、互いに対等な関係を形成させているのか、今後これを明らかにしていくことが日本の道徳教育に良い影響を及ぼすと期待します。

次に、モスク近辺の治安の悪さも気になりました。モスクまでの道のりには東南アジアらしい雰囲気のお店が



途切れることなく立ち並んでいます。そこは驚くほど物価が安く、商品も個性的で外国人にとって興味を引くものばかりでした。

しかし、すれ違う人すれ違う人金をせびってきました。腕を掴んで金をくれと言ってくるのです。これまで、この国である程度治安の良い地域ばかりを見てきましたが、こういう一面もあることを忘れてはなりません。何より驚いたのが、子供を出しにして金をもらおうとする親が何人も見られたことです。子供に金をくれと言わせたり、子供と写真を撮ろうとする観光客に対して金を要求したりと、やりたい放題でした。

ただ、彼らも好きでこのようなやり方をしているのではないと思います。確かに、こういう稼ぎ方に対して避難する気持ちもわかりますが、こうしないと稼げない状況にあるその現状を最も問題視すべきだと思います。

さらに、良くないのはこれを見て見ぬふりすることです。その子供たちが大人になったとき、真っ当なお金を稼げる未来を作ることが我々の世代の使命ではないでしょうか。



Fig.1 CommTech のメンバーとプロモ山



Fig.2 マラン大学のメンバーとマランの素で映える路地裏

## 「インドネシア留学を通して感じたこと」

### 経済学部 1年 入部航太

私の初の海外での異文化交流経験は非常に素晴らしいものだった。インドネシアの地に実際に足を運んで最初に感じた文化の違いは、国全体の雰囲気や日本と比べると“緩い”ということだ。この雰囲気は街の至る所で感じられた。現地の店員の多くは客が入ってきても特に気にすることなくお喋りを続けている。公園の広場では日はとっくに沈んだというのに子供たちが走り回っており、大勢の大人たちが食事を楽しみながら横になったりして眺めている。この雰囲気を緩すぎると思う人もいるかもしれないが、私には非常に心地よく、人と人との結びつきを強く感じるものだった。また宗教の多様さならではの文化の違いにも驚かされた。研修の中で様々な寺院や教会を訪れたが、人口の1割にしか満たない仏教でさえ巨大な寺院が存在する。大学には宗教コミュニティが存在し、それぞれに数百もの生徒が所属している。このように、コミュニティに見える形で異なるコミュニティが多く存在する。さらにはインドネシアでは幼少期には文化的背景の違いに関わらず共に過ごす。このような教育制度もあってか、「違いを認める」という意識がインドネシアの人々には浸透している。実際、異国から来た我々にも大学の生徒だけでなく現地の方々も非常にフレンドリーに接してくれた。この意識がインドネシアの目指す「より実質的な配慮、equalityよりequity」の姿勢の根底にあるのだとこの研修でのプログラムや講義全体を通して理解することができた。またコムテックのプログラムを通して国籍の異なる参加者達と会話する中で感じたのは、国籍で見るとはなく、一人一人と一個人として接することが大切であるということだ。固定概念があるのはしょうがない。重要なのは、会話の際に自身が相手を無意識のうちにその枠に落とし込み、その枠からはみ出す可能性排除して相手が不快な思いをするような話し方をしていないかどうかである。これは出身国に限る話ではなく、年齢、性別なども同様である。このように、自分自身の振舞い方、考

え方を振り返るという意味でも今回の交流は非常に良い機会だった。しかし正直なところ、研修を終え帰国した今、今回のプログラムの中で私が最も有意義だったと思うことは、自身の知っていること、感じていること、文化などを他人と共有する事の喜びを再認識させてくれたことである。初めて訪れる国で、国籍も文化も異なる初対面の人たちとコミュニケーションを取ろうとする。もちろん最初は言語、文化など様々な壁にぶち当たり、日本にいた時と比べ非常に困難に感じられた。それでもめげずに、がむしゃらに挑戦した末に相手に伝わったとき、私はただ純粋に嬉しかった。会話だけではない。一緒に笑いあったときや、自分の文化を知ってくれていた時、同じ歌をみんなで歌ったときにも同じように感じた。普段と異なる異文化交流という場だからこそ、私は改めてこの喜びに気づくことができた。私はこれも異文化交流の大きなメリットだと私自身の体験やほかの参加者の姿を通して感じた。今後はより積極的に交流の場に足を運ぶと共に、言語は当然ながらそれ以外のコミュニケーションのための道具も磨いていこうと思う。



## 「2週間のインドネシアでの研修を終えて」

### 医学部医学科 1年 浅野寿佳

きちんと英語を勉強してから初めて海外に行って感じたことは沢山あった。はじめに英語で話していても、話し相手がネイティブじゃなかったり、ネイティブだったとしても人によって話し方の特徴だったり発音に特徴があり、聞き取りづらいことがあった。例えばインドネシアの人はインドネシア語を発音する時に巻き舌を使うのでrの発音で巻き舌になる。自分が気を付けて聞き取るのもそうだし、インドネシアの人もrが巻き舌になっている状態の発音で聞き慣れているので私の発音でrが聞きづらいこともある。そういうときスペルを伝えたり、言い換えたりすることで容易に意思疎通できるし、お互いに発音の差異があるということは新鮮で話のネタになる。また簡単な単語の組み合わせでも、他の国ではよく使われるけど、自国では全然馴染みのない言葉もあるので、海外の人と話しているときや海外に行った時に英語が通じないからといって自分の勉強不足というわけではないのだと思った。逆にいえば、特に私の場合は受験の英語を乗り越えるための勉強をしてきたのでお手本のような綺麗な発音に聞きなれており、海外に行ってはじめて思っていたよりも聞き取れなくてびっくりした。これからの勉強は色々な国の人の話している動画とかで勉強したり、今までは英語→日本語の勉強が多かったけど日本語→英語の勉強もしっかりしたりして、実際に使える英語の勉強の仕方をしたいと思った。



次に洋楽が歌えると本当に簡単に他の国の人と仲良くなれることが分かった。カラオケは日本の文化として海外でも人気で、遊びに行くってなった時もカラオケは割と主流である。

日本人で一緒に行った人ですごい洋楽が好きな人がいて、海外のメンバーともすぐ仲良くなったし、近くのバーみたいなどころに行ってもそこで歌ったりして現地の人も交流できる。海外では皆有名な洋楽は歌えるし、私は知っている曲が JPOP とかが主だったが、洋楽も含め幅広く知っていると思打ち解けるきっかけになると思う。加えて日本のアニメはとても有名だった。意外と私たち日本人でもあまり知らない日本のアニメとかも海外の人は知っていて日本人と知るとその話題を振ってくれるが、私はわからないということも多かったので歴史とかだけでなく自国の現代の文化とかも知っているといいと思った。また自国の教育方針など政治の話題や宗教の話題も割と海外の人は興味がある人が多いので、自分の考えを持っているといいと思う。この海外研修で他の国の人々との会話を通して、自国のこんなこと気にしたことなかった！といった発見が多く、自国を見つめ直す良い機会になった。

インドネシアの街を歩くと道にはたくさん物乞いの人がいた。また大半の街の人は英語を話すことができず、one といった簡単な英単語も通じなかった。今回私たちが交流した人たちは大学まで通って教育をしっかり受けた人々だったが、教育格差が大きいように実際に思ったし、向こうの学生とそのことを話しても問題視しているようであった。私が想像していたり、調べたりする発展途上国は人さらいとか人身売買とか性犯罪とかが多いというイメージだったが日本で記事になるようなそういった地域は普通じゃないから記事になるわけで、実際に行ったことでイメージとのギャップを埋めることができた。また日本の基準では、職が手につけてない、貧しいこと＝不幸せみたいなレッテルは確かにある。例えば前述した通り道には物乞いの人がたくさんいて、安定した職がなく十分にお金がない家庭もあるだろう。しかしインドネシアでは平日の夜の公園には多くの家族が集まり、子供たちが暗くなっても両親のそばで走り回って遊んでいるといったような光景がみられる。日本では特に父親は平日の夜 18 時に帰ってくることはまずないし、そういった

光景は見られない。家族の時間があり、子供が夜遅くまで公園で遊びまわれる環境は、決して裕福でないとしても QOL や人生の幸福度は高いのではないかなと思う。確かに教育の受けたい子供が受けられないことや満足に食べられないことはよくないし変えないといけないことだが、その反面日本よりも自由で幸せだろうと思う場面もたくさんあった。日本国内の幸せの基準、物事の見方を抜け出してみると世界はさらに面白かった。



少し自分の興味のある分野に移ろう。インドネシアでは圧倒的に喫煙率が高く、大学生もほぼ全員吸っていて禁煙スペースはほぼない。現地の人にどうしてこんなにタバコを吸う人が多いのかと聞くと圧倒的にムスリムが多いため、お酒が飲めない分喫煙する人が多いのだと思うという納得の解答が返ってきた。加えて彼らには喫煙が健康に悪いといった認識は全くなく、どうしてタバコを吸うのかという問いには頭がすっきりするといったような答えが返ってきた。比較的早い段階から喫煙をし始めて聞いた感じ 10 代前半が多かった。よって喫煙者が多いのには 3 つの原因があげられるだろう。1 つ目、ムスリムが多いため酒の代わりになる。2 つ目、健康に悪いという認識があまりない。3 つ目、早い段階から喫煙を始めるため、中毒になりやすくなっている。インドネシアは教育のギャップが大きいことは前述したが、私が気になったのは健康に関する基礎知識が信じられないほど浸透してないことだ。タバコの件もそうだが、放課後近くにある癌博物館にいってきた。癌博物館というほどであるので、専門的な知識かと思ったら中学校の保健体育で学ぶようなことばかりだった。インドネシアの女性の死因は子宮がん、乳がんが 1 位 2 位らしいのだが、知識があれば自分で早期発見できるはずの乳がんなど健康教育がなされてないがゆえに主な死因となってい

るように思う。(実際に博物館内にもそういった記述を見ることができた) 途上国の医療の課題として医師不足とか貧困のため医療費が算出できないとかが主な課題だと思っていたけど、予防医療の確立があまりにもできてないように思われた。それが私個人の今回の研修を通して目標としていた「多文化、発展途上国での医療の違いや課題を見つけること」の中で一番大きな発見であった。

今回の研修ではとにかく積極的に挑戦をすることを意識していた。

食べ物もおすすめされたものを全部試して、体験などもお酒とたばこ薬物以外は全部挑



戦した。トイレの在り方、食べ物、文化、言語すべてが今まで生きてきた環境と違ったが私は全く抵抗なく受け入れられる方だった。そしてこの研修を通してさらに将来海外で働いてもっといろんな世界を見たいという気持ちが強くなった。

## 「インドネシア留学を振り返って」

### 農学部 1年 阿部香菜

今回のインドネシアのプログラムを通して学んだことや感じたことを書こうと思う。

私が学んだことは、日本にはないインドネシアの多様な宗教や文化である。今回のプログラムでたくさんの寺院や教会に行きそれぞれの宗教の生の空気を実感できたと思う。中でも日本では毎日お祈りしたりする文化がなかなかないので、実際向こうで付き添ってくれた方がご飯の前に礼拝をしている姿を見られておお！と感じた。外国の方は自分の宗教以外のことも興味関心があり事前知識が豊富である。私は自分の宗教のことでさえもともに理解してないため、もっと日本のことについて知識を深めておくべきであったと感じた。個人的に印象に残っていることは、イスラム教のモスクに訪れたときにヒジャブを身に着けたことである。ヒジャブにもいろんな

種類があり私が身に着けたものは特別なタイプで風にあおられて制御するのがなかなか難しかった。実際に経験しないとわからないことが多く今回のプログラムではフィールドワークがたくさんあったためより理解を深めることができた。

またプログラムにはアメリカやドイツなどの国も年齢もバラバラな人が集まっていて他の国の文化や価値観を学べる良い機会であった。日本と比べ外国の授業は積極的だと聞いたことはあったけど、思っていた以上で驚いた。気になったことはその時に質問し、または自分にとっては辛かったであろう体験談を話して私たちに共有してくれている姿はとても印象的であった。一方で何も考えずにただ生きている自分に焦りをおぼえるとともにその積極さを見習わないといけないと感じた。

もう一つ私が感じたこととしては、みんな色々な面に関してルーズであるということである。佐賀大学の学生と他の国から来た人たちでホテルが違ったのだが、セッションが始まる時間になっても大学に彼らが乗ったタクシーは着かないし、でもセッションでは質問や発言が飛び交って延長して、時間割はないも同然であった。だが固定されずにその時の考えでその時にしかできない楽しみ方をしている姿は本当にいきいきしていたと思う。また現地の芸術学校を訪問した際小さな爆発が起きた時は火花が散っていたがみんな逃げるところか集まって盛り上がっていたし、街中の路上で飲んだり皆で輪になってカードゲームをしたり、お釣りで落書きをしたお札が渡されたり日本ではあまり考えられないことばかりで小さな日常の中にもたくさんの新鮮さがあった。そのルーズさは私たちに対してでもあった。日本では電車が少し早く出ただけで謝罪会見が開かれるし夜爆音が流れている車が走っていたら苦情がくるだろう。もちろんそれが日本の良さでもあるけど多少くらいゆとりがある生活も良いなと感じた。

違いがたくさんあったため共通した点はより印象的に感じた。同じ音楽のジャンルが好きであったり使っているアプリが一緒だったり現地の学生さんからインドネシアについて教えてもらうことはネットで調べるよりもっとリアルで面白かった。

今回の短期留学は海外やインドネシアに対しての印象が変わり、抵抗がなくなる良いきっかけになったと思う。今まで自分が外国人と呼ばれる立場の環境に

行ったことがなかったため行く前はとても緊張して楽しみの気持ちより不安の方が大きかった。しかし不安など感じる暇がないくらい楽しかったたくさんの課題が見つけることができた。

入学してすぐの応募であったためとても悩んだが勇気を出して参加して本当に良かったと思う。たくさんの刺激をもらったし、日本では経験できないことばかりで充実した二週間を送ることができた。インドネシアで出会った方や一緒に行ってくれたみんな、このプログラムに関わってくれた方、そしてすべての素敵な出会いに感謝したい。



落書きされたおつり



## 「Terima kasih everyone」

### 農学部 1年 杉浦瑞生

私はこのインドネシアプログラム CommTECH Nusantara2023 を通して楽しくて、貴重な体験をたくさんさせていただき、現地に行かないと分からないことを見たり感じたりすることができた。その理由を 18 日間のインドネシアでの生活を振り返りながら述べていく。

まず、このプログラムからインドネシアの多様性、主に宗教や文化、伝統楽器などを学んだ。具体的には学校で宗教割合などの基礎知識を学んだあと寺院や教会に訪問し、寺院の説明や信者の方が宗教の情報などをより詳細に伝えてくれた。他にも ITS には学生の宗教グループがあり彼らの話を聞いていた時には自分と同じ年くらいの人と比べて自分の宗教への関心と知識のなさに恥ずかしくなった。この時感じた気持ちを忘れずに留学生や海外の方と宗教について話す機会があれば、自分の意見をちゃんと言いたいと思った。また、芸術高校に訪問した際伝統ダンスや楽器の体験を現地の高校生たちが身振り手振りで教えてくれた。伝統的な楽器やダンスはインドネシアの中でも地域によって異なるがみんながそのことを受け入れ一緒に学んでいる様子が印象的だった。総じてインドネシアの人々は違い、多様性を受け入れることは当たり前でどんなバックグラウンドを持っていたとしても一個人として人と接しており、素晴らしい人たちがたくさんいることが分かった。

ここからは私がインドネシアに行って一番驚いたことを紹介していく。1 つ目は、みんなが道路を横断している風景である。横断歩道はあるが少なくみんな何も無い普通の道路を運転手とアイコンタクトをしながらわたっていた。最初は危ないと思ったがチャレンジすると意外とスリルがあって楽しく最終的には現地の人並みになった。2 つ目はみんな時間にルーズだったりと全体的に緩いところです。大学でのセッションが 9 時から始まる予定が毎回 9 時半になったり、大学にみんなバスで行く時には集合時間の 30 分オーバーになったりと日本人からすると考えられないほどみんなマイペースで余裕があった。このマイペースさを見習おうと思った。3 つ目は食べ物だ。有名なナシ・ゴレンやサテーなどインドネシアで食べた食べ物はどれもおいしかった。たまに辛すぎる食べ物もあったり、揚げてあるものが多いのでこれらが苦手な人にはきついかもしれない。

このプログラムにはアメリカやドイツ、タイ、ベトナム、マレーシアから来た留学生も参加しており、彼ら彼女らと

仲良くなれたことでより内容の濃いものになったと感じている。年齢も経歴も全く異なったみんなと一緒に授業を受けて積極的に自分の意見を発言する姿に刺激を受けた。また私たちがわからない特に理解できるように簡単に説明しなおしてくれたことでより理解を深めることができた。放課後には一緒にネイルに行ったり、食事に行ったりショッピングといろいろな場所に誘ってくれて毎日が充実したものになった。

また、プログラムが終わった後に行ったマランでは現地の大学生が町を案内してくれたり一緒に滝や遊園地に行ったりとすごく良くしてくれた。ある1人と同じアーティストが好きで盛り上がったときはすごく楽しくて国や言語、文化は違っても共通の話題で盛り上がりえる楽しさを知ることができた。

彼らと話すうえで英語力が乏しく、伝えられないことが多くて悔しい思いをたくさんした。もっと彼らと話すために speaking を強化したい。具体的には積極的に留学生と話したり、オンライン英会話の活用や映画、音楽を英語で聞くなどしたい。

この短期留学がすばらしいものになったのは国際課の皆さんはもちろん、プログラムを企画してくれた ITS の方々、支援してくれた両親そして一緒に行ったメンバーのおかげだ。特に私を除く6人とはたくさんの楽しかったことしんどかったことを共有し言葉では形容できないほどの仲になったメンバーだと思っている。関わってくれたすべての人たちに感謝し、この留学がこれからの自分の生活、キャリアに繋げていきたい。



芸術高校の生徒たちと



登山にて日の出をバックに



東南アジア最大の動物園で